資料シート

幼児編 テーマ11 あなたのしらない絵本の世界

子どもにとって、お母さんやお父さんに絵本を読んでもらうことは、わくわくしてとても楽しいものです。読み聞かせは、**子どもの想像力を豊かにする**だけでなく、お子さんと読み手であるお母さん、お父さんだけの世界で、**本を通じたコミュニケーション**の場にもなります。

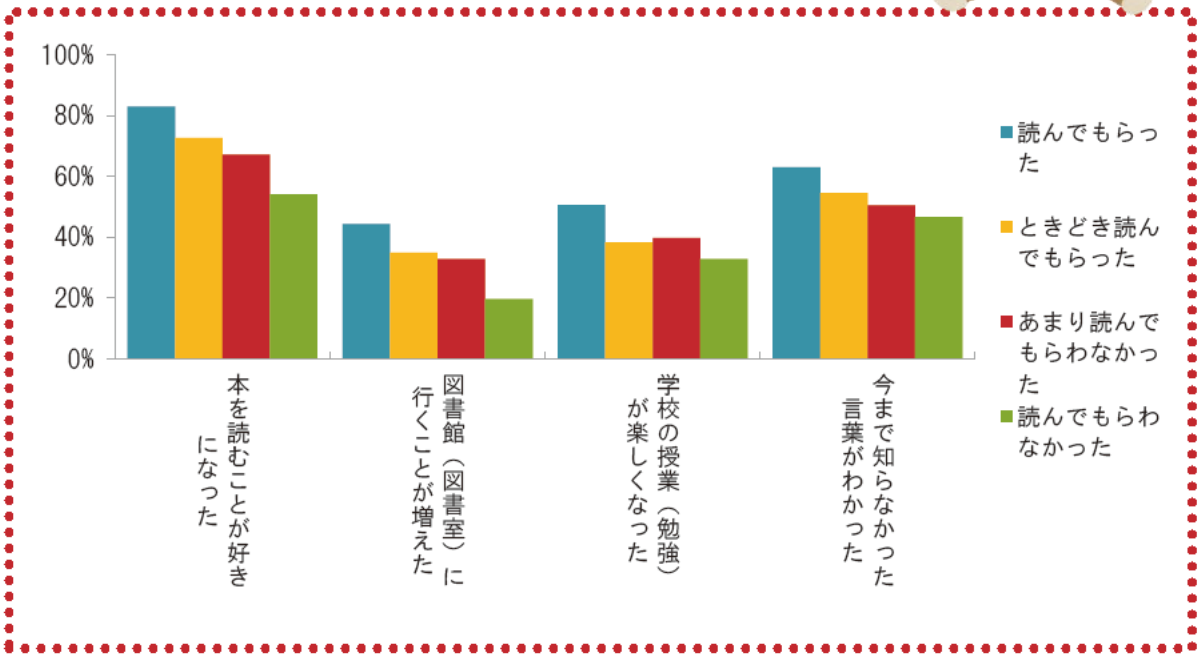
また、物語に興味を持つようになるだけでなく、新しい言葉やことがらを学びながら、ひとりで読むことのできる力を身につけていくことで、小学校以降の読書習慣にもつながっていきます。

あまり絵本を読む習慣がなく、どんな風に読んだらいいのかわからなくても大丈夫です。**読み方にルールはありません**。お母さん、お父さんも本を楽しみながら読んであげるだけで、その楽しい気持ちごと子どもには伝わっていきます。

また、本を選ぶ時には、図書館も積極的に活用しましょう。おすすめの本を司書さんに尋ねてみると新たな発見があるかもしれません。

ぜひ、親子のお気に入りの絵本を見つけてみませんか？

＜小学校入学以前の読み聞かせ経験＞



資料：文字・活字文化推進機構「子ども読書活動推進に関する評価・分析事業報告書」（2010 年）

パパもいっしょに　えほんをよもう　その２

＼子どもの本専門店メリーゴーランド（四日市）増田 喜昭さんに聞きました／

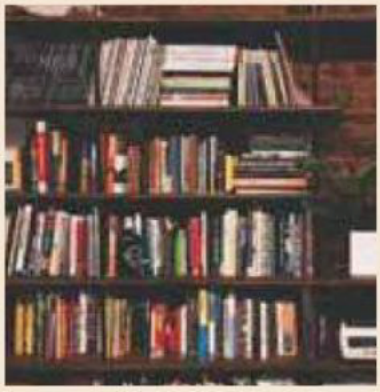
自分が本を楽しめる場所に子どもがいる

絵本を読むのに技術なんていりません。読んであげているんだという気持ちで読むのではなく、お父さん自身が心から楽しむことが大切なのです。丁寧に、楽しんで読んであげると子どもたちも喜ぶでしょう。

お父さんのひみつの本棚

ここでちょっとした提案を…

お父さん自身が良いと思った絵本を10冊ほど集めて本棚にしまっておき「ひみつの本棚」を作ってみてはどうでしょうか？ お父さんが「とっておきの本を読んであげるよ～」とひみつの本棚から絵本を取り出せば、子どもたちは「ひみつの本棚のおはなし読んで～」と楽しみになることでしょう。



出典：「みえの育児男子ハンドブック　PAPALIFE」より抜粋

コラム

クシュラの奇跡

1971 年、ニュージーランドで、クシュラという女の子が先天性の重い障がいを持って生まれました。

視力や聴力をはじめ重い症状を持つ障がいのため、1 歳まで生きられるかどうかという状態だったそうです。

それでもクシュラの両親は希望を捨てずに、彼女を必死で育てました。

そして、生後 4 ヶ月のときのことです。それまで何の反応も示さなかったクシュラが、絵本の読み聞かせに反応したのです。

それをきっかけに、両親は毎日絵本の読み聞かせをするようになりました。

最終的には 140 冊の絵本を、毎日、くり返し、くり返し、本によっては 100 回以上もクシュラに読んで聞かせました。

その結果、クシュラは 3 歳になるころには、豊かな感情と言葉を取得し、文字に興味を持ち、走り回ることもできるようになりました。

「クシュラの奇跡」と呼ばれるこの実話からは、子どもへの愛情の尊さだけでなく、絵本の力や読み聞かせの効果を実感できるのではないでしょうか。

参考：ドロシー・バトラー著「クシュラの奇跡―140 冊の絵本との日々」（のら出版・平成 18 年発行）